

やはり一色いろはの青  
春ラブコメはまちがっ  
ていない

シシヤン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

高校3年生になった一色いろはは、受験や生徒会の活動など様々なことに頭を悩ませていた。

そしてもちろん卒業していったあの先輩のことも。

4話

3話

2話

1話

# 目次

17

12

7

1



## 1話

「はあ…」

ついつい溜息が漏れてしまう。最近、というか奉仕部の先輩達が卒業してからは悩み事がどうしても溜まりがちだった。

生徒会活動が行き詰まった時や受験のこと、更にその他人間関係などなど… これらの悩み事を気兼ね無く相談できた奉仕部という場所が私にとつていかに大事な場所であつたかを再認識させられる。そしてなによりあそこには私の憧れる先輩がいた。

先輩は腐った目と捻くれた性格とシスコンという3つの致命的な弱点があるもののそれら以外は割とスペックの高い方でして…

妹の小町ちゃんがいるせいとか妙に面倒見がよく、さり気ない気遣いにも長けているうえ、顔は真面目にしていればそこそこカッコイイ、更に頭も結構良いとくる。

とまあ語りだしたらキリがないんですけど、残念ながらLINEも電話番号もしらないので連絡はとれず、今でも先輩がいてくれたら色々相談できたのになあと思うわけです…

「はあ…」

再び溜息をつき、飲み物をとりに私は自室をでてキッチンに向かった。

冷蔵庫からお茶を取り出してコップに注いでいると、ふと机の上に無造作に置かれたチラシに大きく書かれている「家庭教師を体験してみませんか？」という文字に目がいった。

家庭教師かあ 最近自己流で勉強するのも辛くなってきたし1対1で丁寧に教えてもらうのもありかもしれないな

あ、でも戸部先輩みたいなめんどくさいタイプの先生つてたまにいるからそういう人だったら嫌だな。まあ体験って書いてあるしやってみようかな。

そう思いながら手に取って暫く眺めていると講師紹介欄の隅っこに載っていた人物の写真で目が止まった。

そこには死んだ魚の様な目をし、いかにも気だるそうにカメラを意識しようとすらない男性が写っていた。言うまでもなく私の大好きな先輩である。

それを見た瞬間に私は家庭教師体験を申し込む決心をした。

お母さんに相談すらしてないが、速攻で電話をかけて比企谷先生でお願いします！と頼んでしまっていた。

我ながら恐ろしい行動力！

べ べつに先輩と2人きりでお話できるとか、悩み事を残さず聞いてもらうチャンス

だとか、平塚先生が教えてくれないから本人からどこの大学に行ったのか聞き出した  
とか、勉強以外の理由で申し込んだ訳じゃないんですよ？ほんとうに!!

お母さんには後で言えばいいよね 体験だしだし!

日曜日 ついに先輩がうちにやってくる日がやってきた。

たのしみすぎてここ数日全然寝れてないのは秘密ですが…

約束の時間が近づくと共に自分がドキドキしまくってるのが恥ずかしいくらいよく  
分かった。

あくもう なんでもこんなドキドキするんだろー

髪型変じやないかな、ちゃんとメイクもきまつてるよね？

よしよしよし… 落ち着け私!

短いようで長い時間をそわそわしながら過ごしていると、ピンポイントインターホン  
が鳴らされたのが聞こえた。

私は返事すらずに玄関に直行した。

ドアを開け、見てみるとそこには久しぶりに見る先輩が立っていた。嬉しさのあまり早口になってしまふ。

「はい あ、せんぱーい！ お久しぶりですー どーぞどーぞあがってくださいー」

「名前を聞いた時断ろうと思ったんだけど、やっぱりお前だったか… わずかな同姓同名の確率に賭けたのはやっぱりダメだったな」

先輩は相変わらずの反応だった。でもなんだかこの感じが懐かしくて嬉しかった。ただ私の名前聞いて断ろうと思ったとかひどいなあ… ここはちよつと甘えにいつてみよつと。

「ちよつと先輩ひどくないですか?! 私じゃ不満なんですかー?」

語尾を少し甘えたような声に変え、上目遣いで先輩を見つめる。

「相変わらずお前はあざといな…」

「むー！あざとくないですよ！ まあもういいです 先輩ですもんね… はやくあがつ



てください」

「お、おう」

とりあえず先輩を居間に案内し、お茶を差し出して私が腰を降ろすと先輩がさつそく疑問をぶつけてきた。

「で、なんでお前は俺を選んだのよ 嫌な予感しかしないんだけど…」

「そんな冷たいこと言わなくてもいいじゃないですかー 先輩達が卒業してから、誰も私の悩み事を聞いてくれなくて大変なんですよー」

「まあお前のワガママを聞いてくれる人なんて俺達以外にはいなかったらうな」

「ワガママじゃないです！ 悩みですよ!! それといなかったって過去形にしないで下さい！ 今から悩み事聞いてもらうんですからね？」

「ワガママだかワガママだか知らないけど、俺はお前のワガママを聞きにきたんじゃないよ、勉強を教えに来たんだからな？」

「だからワガママじゃないですよ!!!勉強も勿論教えてもらいますけど悩みも聞いてくれなかつたら小町ちゃんにチクリますからね！」

「任せろ 悩みを聞くだけなら得意分野だ」

「小町ちゃんの名前出した瞬間それですか…」

「こんな対応をとる先輩だけどやっぱり楽しい。」

「こんなやり取りがずっと出来たらいいのになと思う。」

「やっぱり私は先輩が好きだ。先輩の隣は私にとってとても心地が良い。」

## 2 話

「そういえば先輩、なんでカテキョーのバイトなんかやってるんですか？」

解いてみると言われた現代文の問題を読みながら、ふと疑問に思ったので聞いてみる。

よくよくかんがえたらこんな性格をした人が普通家庭教師のバイトとか選ぶわけないですし。

すると先輩は、いつもの嫌そうな顔で答える。

「平塚先生の友人がこの家庭教師塾を運営してるんだが、どうやら人手が足りないらしくて頼み込まれちゃったんだよ」

「あゝ 先輩なんだかんだ頼まれると弱いですもんねえ」

「全力で断って最大限まで嫌な顔をしたのに、ダメだったただけだ」

「そこまでされても引受けさせる平塚先生すごいですね…  
今度先輩のしつけ方を教わらなければ…」

「だから結婚出来ないんだろうなあ…」

「あ あははは… でも頼み込まれるってことは先輩結構いい大学に行ってるんですね」

「まあ多少はな」

「どこの大学ですか？」

大学の話を持っていくことに成功したので、ここでさりげなく聞き出そうとする。

「別に教える必要は無いだろ」

先輩はしらつと言う。やっぱりそう言うと思いましたよ…

まあでも予想はしてたので、ここはしっかりと切り返す。

「えー 気になるじゃないですかー それに私まだ志望校決めてないので、参考までに  
と思いまして〜」

「もう6月だしそろそろ志望校は決めないとマズいな ただ俺とお前の学力差だと、あ  
まり参考にならないと思うぞ」

「ちよつとそれどういうことですか？ 私がバカだって言いたいんですか？ 先輩と同  
じ総武高の可愛い可愛い後輩ですよ!? 私だつてちゃんと受験して受かってるんです  
からね!!」

むくれて言うのと、先輩は

「あーそういえばそうだったな 表面上あぎとすぎてバカっぽいから忘れてたわ」

「あぎとくないし、バカでもないですよ!」

全くほんとにひどくないですかねー!? でもSつ気のある先輩もいいなと思つてし  
まう… なんか悔しいから仕返ししよう。

「まあでもなんて言われてもいいです。だからせんぱい……お・し・え・て・♡」  
上目遣いでジリジリと先輩に近寄りながら甘い声を出す。

すると先輩はうつと声を出し、頬を赤らめ私が近づく度に後ろに下がる。

だが、突然なにかに気づいたのか はっとしたように言った。

「そういえばもう時間だけど、解き終わったのか？」

「あ……」

そういえば問題を解いてる最中だった。

先輩の大学を聞き出すのに必死になりすぎてしまった……

私が解いてないことを察すと先輩はため息をつき

「しょうがないから一緒に解きながら解説するけど、それでいいか？」

「はい… すみません…」

「…まあなんだ 全部やり終えたら教えてやるよ」

私が萎んでいるのを見た先輩が言う。ほんとそういうところがドキツとするからやめてほしい… いや、やめてほしくないです。むしろもつと欲しいです。私だけにください！

「…はやくやりましょう先輩!!」

「いや、一気にやる気出過ぎだからね？ 全く…」

呆れたように言う先輩だけどその表情はいつものように嫌な顔ではなく、どこか優しさに満ちているように見えた。

### 3話

「…よし まあこんなもんだな ちゃんと後で復習しておけよ」

「はい」

問題を一緒に解き、解説してもらったが先輩の説明は普通にわかりやすかった。それに真面目にしてる時の顔は普通にカッコイイ。…目は相変わらずポケーツとしてるけど

「そろそろ授業も終わる時間だしちようどよかったな」

「そうですねー 久しぶりにお話出来て楽しかったし、先輩の解説もわかりやすかったです ありがとうございます」

「おう、それはよかった じゃあ俺は帰るから」



先輩はいそいそと支度を整え、帰ろうとしたので、そこをすかさず袖を引つ張る。  
そうはいきませんよ？先輩♡

「先輩、解き終わったら大学教えてくれる約束でしたよね？」

じつと見つめながら言うのと、先輩はたじろき

「お、おう そうだったな でもそんな真剣にされると言いにくいんだが…」

「先輩がさっさと帰ろうとするからですよ！ はやくやく」

先輩はため息をつくのと、ぼそつと大学名を告げた。

「…先輩 頭良すぎじゃないですかね」

「だから言ったただろ あんま参考にならないと思うぞつて」

「そうですけど」

先輩が言った大学名は、誰もが1度は聞いたことがある有名なものだった。

うーん、同じところに行くのは結構ハードル高いなあ…

「…もう言ったんだからはやく袖離して？ 伸びちゃうし」

「あ、すみません でも帰るにはまだはやいですよ？」

「え なんで もう終わったでしょ」

「悩みも聞いてくれる約束でしたよね？」

「それ今日の話だったのかよ…」

「もちろんですよ このままうちで聞いてもらってもいいんですけど、なんかそれだと味気ないのでどっかカフェにでも行きましょう」

「はあ… まあ暇だしいいけどね…」

「やった！ じゃあ準備してくるので待っていてください 逃げちゃダメですよ？ なん

なら縛っておきましようか？」

「わかったわかった 逃げないからちやちやと仕上げてこい」

先輩はそう言うのと、腰を下ろしてカバンから文庫本を取り出す。その姿を見て、つい立ち止まってしまう。

「…なにどしたの」

「あ いえ なんかそれ懐かしいなーなんて」

「ああ いつもあそこでは本読んでたからな」

「はい… すみません準備してきますね」

「おう」

そそくさとリビングを後にして自室に向かう。

先輩たちが卒業した今、奉仕部の使っていた教室は資材置き場となっていた。いわば

物置みたいなものだ。

今でもふと本を読みながら椅子に座っている先輩を思い浮かべて、ふらつとあの教室に行つてみたりするが、もちろん誰かいるはずもなくしんと静まり返っているだけだ。

それを見る度に悲しくなっていた。卒業式から三ヶ月しか経っていないのに何度も何度もあの教室を訪れてしまう。

ある程度予想はしていたけれど、まさかここまで寂しいと感じるとは思わなかった。まさに心に穴が空いたような感覚だった。

あの空間がなくなつたことでもう先輩を見られないのかも 会えないのかもと。だから今さつき、本を手にして座る先輩を見ることが出来たととても安心した。

そして欲しいと思つた。今は私のものではない彼を…

## 4話

準備を終えてリビングに戻ると、先輩はさつきと同じ体勢で本を読んでいた。

「すみません お待たせしましたー」

「おう 意外と早かったな」

「先輩のために急ぎましたからね」

この人はこんなふうにはいよいよいくすぐる言葉を入れても、

「はいはい そういうの俺にはわからないからな」

こんな感じに流される なんてか知らないけど、慣れてるんだよなあ……

まあ先輩が今日うちに来るのは分かっていたから、メイクはバツチリだし 準備といっても財布の用意とちよつとした身だしなみチェックくらいだったんですけどね！

とりあえずデートに連れ出すことには成功したので、後は連絡先さえ聞き出せば今

日のノルマは達成かな。

それもそもそも小町ちゃんに聞けばいいだけなんだけど、あの子鋭いから好きなのがバレて、からかわれてしまいそうなので恥ずかしくて躊躇していた。本人に直接聞いても、なんで?とか言って教えてくれないだろうし…… うーん なんか正当な理由があればなあ。

私の唸り声が漏れてしまったのか、先輩が口を開いた。

「そんなにどこのカフェ行くかで迷ってるのか?」

「え? あ はい そ、そうなんですよ ある程度考えてはいたんですけど、折角だからもっといい所ないかなーって考えてまして」

「へえ そんなもんなのね まあ俺はどこでもいいけども」

「先輩は気になるところかないんですか? あるわけないかあ」

「おい 俺が答える前に落胆するのをやめろ ありませんけどね」

「結局ないんじゃないですか…… まあ迷ってても仕方ないので、私が目つけてたところ行ってみましょう！」

「はいよ で、その一色セレクトはどの辺にあるんだ？ 歩いて行ける距離なの？」

「駅のはずれの方にあるので、歩いていくには少し遠いですねー でも先輩どうせ自転車ですよね？」

「なんだよどうせって…… チャリはかなり実用的なんだぞ」

家出て、先輩が自転車にがちゃんと鍵をいれて跨ると私もその後ろに腰を下ろした。すると先輩が怪訝そうにこちらを見て言う。

「……何やってんの」

「えへへ 実は私、二人乗りに憧れてたんですよ」

「流石にチャリを持ってないなんてことはないだろ はやく出してこい」

「先輩 話聞いてました？」

「いや、まあ別に載せてくのは構わないんだが帰りは歩きになるぞ」

「何言ってるんですか ちゃんと家まで見送るのが先輩の使命です」

「マジですか……」

「当たり前です」

「はあ わかりましたよ…… 駅の方だったな」

「はい！ お願いします♪」



先輩は頷くと、前を向いて自転車を漕ぎだす。これで今日は家に帰るまで一緒にいれることになった。

文句は必ず言うけど、なんだかんだいって先輩は優しい。

そしてその優しさが嬉しい。やばい ニヤける。

前には先輩の背中がある。痩せ型でも男の人なので、大きくて広い。イタズラとかする気はなかったのだが、なんだか触れたくなくなってしまい、手を伸ばしてしまった。

「ちよ、おい おま くすぐりたいからやめろ」

「すみません つい手を出したくなってしまったというか……」

「…お前結構危ないこと言ってるけど、大丈夫か？」

「そ、そういう意味じゃないですう！」

ほんと先輩はデリカシーがない。全くもう……

目的地的のカフェは隠れ家的な雰囲気のあるオシャレな所だった。こういうのに興味  
のなさそうな先輩が、珍しく感心したように店内を見回している。

「そんなに気に入ったんですか？」

「ああ、なんかこの落ち着いた感じが好きだ」

「へえ 意外ですねー」

「親近感ってヤツだな 人目を避ける様に佇んでるし」

「隠れ家のイメージをそんな風に捉えて親近感を持つ人が存在するんですねえ……」

「その言い方だと俺の存在が否定されてるみたいだに聞こえちゃうからやめてね？ それ  
に隠れ家〓人目を避けるってのはあながち間違ってるんじゃないだろ」

「まあ確かにそうですけど……」

するとそこで聞き覚えのある明るい声が入ってきた。

「あれ？ヒツキーだ やっはろー！」

振り向くと、結衣先輩が手を振りながらこちらに笑顔を向けていた。そして隣りには雪ノ下先輩の姿もあった。